

Title	Swastika 文様について(V)：印度に於ける考察
Author	辻合, 喜代太郎
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 2 卷 4 号, p.8-15.
Issue Date	1955-03
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	正誤表別ニアリ

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

Swastika 文様について (V)

— 印度に於ける考察 —

辻 合 喜 代 太 郎

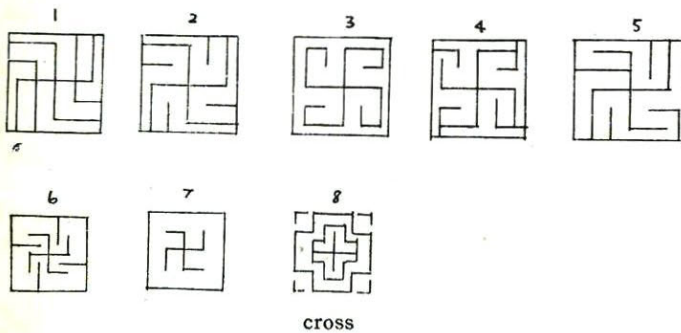
印度に於ける Swastika 文様の発展は特に古代の諸国に比較してある特種な意義の下に重要な発展過程を辿っていると考えられる。特に本稿に於ては古代印度の Swastika の発生と考察及び其の応用としての Village ; Town planning について述べたい。

(I)

印度に於ける Swastika の発生と考察。

Swastika は既に紀元前3000年と推定された Mohenjo-Daro から出土した Seal に極めて洗練さ

Fig 9. Seals. (Mohejo-Daro) BC 3000



れた手法で表現されているのが見られる。^{註1} (Fig. 9) 之等の Seal に見られた Swastika 文様は印度に於ける宗教発生以前に遡つた時代であることは勿論である。他面 Swastika の発生活源に関して現在其の場所、時代を明確に規定することは到底不可能である。^{註2} 然し Mohenjo-Daro 出土の Seal に見

られた Swastika 文称は恐らく印度最古のものと推定してよかろう。^{註3} 一般的に Swastika 文称は印度

では他地方に於けるよりも宗教と特に密接な関係をもちこの文様が又宗教独特の神秘的な象徴性を表はしていたと考えてよい。然し、如何なる理由でこの文様が宗教的な象徴として尊敬せられたかは明らかでない。この文様と宗教的な象徴性について僅かに Jain に於けと象徴としての Swastika について述べよう。

Virchard. R. Gandhi ^{註4} によると「Swastika は Jain 哲学で極めて高遠なものと考え、後世に到つて男、女性の Principles の結合を再現した」ものと考えた。

更に Jain Swastika の特種な意味を考究すると、水平線 —Fig. 10— と垂直線は直角に Greek cross を形成する様に交叉する。これは mind と matter を夫々象徴したものである。Cross の腕が直角に屈曲することにより四個の他の線と三個の円、三日月及び三日月に圍繞された小円を附加する。かくてこの理念は Material の世界に存在した Soul の四階級を象徴したものであると考えた。即ち第一階級のものは最低下の状態—Archaic 又は proto plasmic life—であり、第二階級は Soul の包含された状態—Plant, animal life をもつた Earth であると

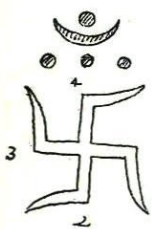


Fig. 10

Gandhi による説明。

- (1) Archaic or Protoplasmic life.
- (2) plant and animal life.
- (3) Human life.
- (4) Celestial life.

した。而して第三階級は Human life とし、第四階級は Celestial と考えた。この Celestial の意味は人間以外の他の世界に於ての life を指摘していた。而して之等の階級はそれぞれ異つた Scale に於ての Soul と Matter との結合よりなつていた。精神的な plane は Soul が Matter の羈絆から常に生長するものであると考え、その plane に到達するためには三個の円(宝) — 正しい信仰知識、行為 — を把握する必要がある。人々が之等の三個の宝を把握し三日月で表示した所謂自由の境地に到達せんとして漸次向上すべきであると教えた。即ち三日月は上昇を意味した象徴であり常に拡大すべきものとした。三日月に圍繞された小円は十全な自覚の域に達した Soul の全知の状態を表示したものであり、即ち自由の境地であり、凡ての matter から離脱したことを意味したのである。

この様に Swastika は Jain では神秘化された Sign と考え、上述の三個の宝や終極の Good に到達することを意味した。之等の象徴は人々の精神を安静に導き同時に永劫的なものへと憧がれしめたのである。

Mr. Gandhi は更に Jains は Swastika Sign を屢々作るが、Roman Catholic が Cross の Sign を作る様に考えていた。それは寺院に抱束されたものでもなく又僧侶によつて抱束されたものでもないと述べた。何れも Benediction 又は Blessing のために Swastika は使用されたとした。Jain に於ける Blessing のためとして Swastika に (Fig. 11) ついて次の様にのべている。「Rice,

Meal. Flour, Sugar, Salt の一握又は若干量を円形の直径3—4吋の厚さに盛る。(a) この円形の外側から (b) に示した様に上部、左方下方、右方へと指で Swastika を描く、更に Swastika の各々の腕の端を延長して (c) の様に特種な Jain Swastika を形成する。この Swastika は上述の Jain Swastika の意味を表示したものとした。

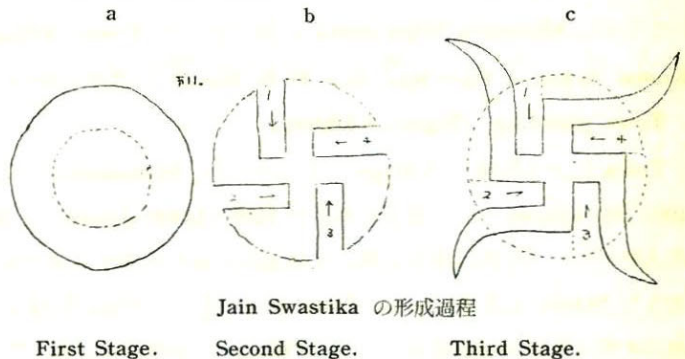
Jain に於ては屢々この様な

儀式を行つた」と述べている。仏教に於ても Jain と同様に普ねく Swastika は使用されていた。特に仏教に於ては釈迦の Symbol として表示されていたものであり、其の遺例は Cave Temple や BC IC 頃の Amaravati の medallion に見られる。^{註5}
^{註6}

(II)

古代印度に於ける Village, Town planning.

Fig. 11



古代印度では Swastika 文様は宗教と親密な関連性があつた。更に Town, Village Planning は宗教に基づいて企画されたと考えられる。即ち、Planning に Swastika に準拠した型式が見受けられるのである。古代の Town, Village Planning については唯一の古典と解せられている Mānasāra-Silpa'sāstra 及び種々な 'Sastra に見られる。

即ち代表的なものを示すと、

- | | | |
|------|----------------------------|------------------------|
| I | Mānasāra | |
| (i) | Grāmulakshana-Vidhāna | Villages chap. (IX) |
| (ii) | Nagara-Vidhāra | Town. Fort chap. (X) |
| II | Amsumad-bheda of Kā'syapa. | |
| | Grāmādi-lakshna | } Village (M. IX) |
| | Grāma-lakshna | |
| III | Mayamata Silpa'sāstra | |
| | Grāma-Vinyāsa | Villages (Mānasāra IX) |
| | Nagara-Vidhāna | Town. (Mānasāra X) |
| IV | Vis'vakarma-Silpa. | |
| | Durga-nirnaya | Fort. (Mānasāra X) |
| V | Sanigrana (Mayamata) | |
| | Grāma-Vinyāsa. | Village. |

以上の中最も詳細に敘しているのは Mānasāra 'Silpa'sāstra であるといはれる。

ここでは Mānasāra-'Silpa'sāstra に規定された Town, Village Panning について Prasanna Kumar Acharya, Rām Rāz, 及び E. B. Havell の諸説に基づいて検討しようと思う。

Town planning. (Nagara-Vidhāna)

Town は又大規模な Village ともいはれる。Mānasāra によると最小の Town の規模の単位は 100×200 dandas とし、最大の単位は 7200×14400 dandas の dimensions であるとした。Town の占有している位置は東から西、又は北から南の方向に設計されていた。Town には凡て1—12の大きな Street を必要とした。Town は河の近傍又は山の近傍に建設されるものとし外国人との交易に至便な位置を必要条件とした。Village と同様に壁、溝、門、drains, Park, common shop, Exchange, Temple, Guest-house, College が設けられた。外敵防禦の目的のために一般的に要塞化されていたのが多かつた。

Town は通例八階級に区分されていた。Rājadhāni, Nagara, Pura, Nagari, Kheta, Khar-Vnta, Kubjaka, Pattana とした。之等の各々の区別は極めて簡単である。特に Pattana の型式は一大交易港をもつていたのであり、他の型式は必ずしも港をもつていたとは限らない。Pattana 型式は多くは河口又は河堤に位置し、宝石、絹布、布、香料を交易したといはれる。他の型式は概ね Town の大きさによつて区別された名称であり、Mānasāra には詳細を明記していないのである。

Town planning と關聯して Fort が考えられた。古代の Town には Fort は必然的な条件でも

あつた。Fort は初め 8 種に区分されていた。即ち 'Sidira, Vāhini-mukha, Sthāniya, dronaka, Kolaka, Sanividha 又は Vardhaka, Nigama, Skandhāvāra である。又、Fort は其の存在位置に基づいて、その区分は種々に呼称されていた。即ち Mountain-fort (Giri-durga), Wood-fort (Vana-durga), Water-fort (Jala-durga), chariot-fort (Ratha-durga), God-fort (deva-durga), Ragoon-fort (Pan'ka-durga), 混合形式 (Mi'sra-durga) である。Mountain-fort は更に其の位置によつて(1)山頂、(2)谷間、(3)斜面と区分されていた。

凡て之等の fort は頑固な壁、溝を繞らし、壁は特に Brick, Stone や同様な堅固なもので建設し、その高さは 12cubits とし、其の基底での厚さは 6cubits を標準とした。又壁上には所々に Watch-tower を設けたという。

(II)

Village 又は Town plan に於て、先づ最初にその中心点の位置の決定については Silpa 'sāstra に記述された構成の法則に従つて Gnomon^{註10}の影の方法に基づいて確定する。次に村の主要な Street の配列は設定される。一般的に大規模な Village の plan は 'cosmic cross, の方法に従う。この方法は宇宙の四部分を表はした 'Magic Square, を意味したものである。而して indian craftman の実際的な仕事に対してこの神秘主義が重要な役割を演じている。古代印度に於ては凡ての art は Magic, であると考えられた。之等の形式の Mag-ical Virtues は単に多くの時代を経て、印度の Village 又は Town を实际的に planning し、最も適応性のもつたものとして重視し、更に外敵よりの最善の防禦目的に適當するか否かを検討した結果、その Village の plan を決定している。その plan の easterly axis は本来主要な Street であり、終日太陽に浴することによつて純化されるべきと考えた。又南北に通じた短い道路は互に主要な道路に交又する。即ちそれは大氣の完全な流通に最適の条件を得る様に plan されたのである。

cosmic cross の arm を形成している 2 つの主要な Street には何れも Umbrageous Tree を植えている。東西に走る長い Street を Rājapatha—王の道—と呼び、北南に走る短い Street を Mahakala—巾広の Street—と呼ばれた。他の Street を Vāmana—South Strsst—とよび、南の quarter^{註11}を表はした神秘的な象の名称に起原していた。Village の内側の壁又は柵 (Stockade) を円形に囲繞した Road 又は巾の広い Path は Mangala-Vithi—祝福 (Auspiciousness) 又は Good Fortune—道—といつた。この Road は僧侶が Pradakshina の儀式又は巡回の Performance に日々往復した Road^{註12}である。

2 条の主要な Road の交叉した中央部は local affair を調整し Elders の会合の為の meeting place とした。而して村の構成が極めて大規模な場合を除外して Mote-house 又は Assembly-hall として使用された。mound の上に Banyan 又は Pipel Tree (菩提樹) をうえ而して Mandapam 又は木の Pavilion の Brick 又は Stone の柱を設けた。この古代の Aryan の Village の習慣として Bodhi tree 又は 'Tree of Knowledge, に対する理念の根原については深い意味をもっている。即ち村の Elder の tree は精神的な悟を求めた Yogi の為に必要な黙想の場所となつた以前から Sage (聖者) の知識に結合したものである。その上象徴的又は神秘的な意義及び Council tree に

それ自身適合したものとして Cosmic cross の中央に植えた、Vishnu の Tree である。

小規模な村に於ては Council tree 又は "Tree of Justice, は indo-Aryan の Village の政治を司る House-holder の一般的な meeting place のための重要な遮蔽物ともなつた。

Mānasāra には大規模な村の Street の最大の巾員を 5 dandas と規定した。他の Street の巾員は 1—5 dandas とし、他に種々なものもあつた。単一の Cottage の大きさは 24×16 feet から 40×32 feet の面積と規定した。それらの Cottage は一般に 4 個宛群がつて内部は正方形又は Quadrangle 型式となる。この方形の Square は毎夕 牧牛を誘導し Household に保護するために適応せしめる目的があつた。この様な各々内部に内庭を持つた単一な Habitation の中に結合された 4 個の Cottages は indian house plan の発展に於ける重要な段階を示していた。然かもこの Cottage は Aryan 社会で重要な人格を具へた Herdman 又は Village の Headman かの何れかに所属していたものである。而してそれらの地位の人々は必然的に世襲的と規定せられた。此の様な House plan の derivation は明かに熱帯地方に適當した型式である。之等が Single Cottage 又は Village hut と同時に House-planning の unit を形成している。故に Village plan は Town planning の Mahalla 又は ward を形成するに使用された。

Mānasāra に於ては彼等が占有した土地の広さによつて Village と Town に関して多数の階級を認めている。Village の面積の unit は 400 dandas 又は 500 dandas の方形である。大規模なものでは 2000 dandas 即ち 30 哩の方形となる。其の面積の 1/3 は建物面積であり、その他は彼等の共同占有の農地である。その plan は Village 又は Town の何れに於ても方形である。然し大規模な Town には東西に通じた長い Road をもつた Rectangle 型式もあつた。Rāmāyana に見える Ayodhya, の Town の Proportion は其の Town の巾員と長さの比率は 1 : 4 であるとした。Pataliputra に於てはその比率は長さ 9 哩でその巾は 1½ 哩である。即ちその形式は Hindu Gaur 又は長い Rectangle である。その長辺の 1 辺は一般的に河又は湖に面し、凡ての住民の水路に便となる様に配列された。

Mānasāra に記述された前述の 8 種の Village type について Rām Rāz はその形式の由来を次の様に説明している。

- | | | | | |
|------|---------------|---|--------------------------------------|----------|
| I | Dandāca | = | Rese Mble the <u>staff</u> . | (fig. 1) |
| II | Nandycavarta | = | the abode of <u>happiness</u> . | (// 2) |
| III | Padmac'a | = | <u>lotus flower</u> . | (// 3) |
| IV | Svastika | = | mystical figure of <u>Swastika</u> . | (// 4) |
| V | Sarvatobhadra | = | in every respect <u>Happy</u> . | (// 6) |
| VI | Prastara | = | Shape of a <u>conch</u> . | (// 5) |
| VII | Carmuca | = | Resemble the <u>Bow</u> . | (// 7) |
| VIII | Chatur-micha | = | thath which has <u>four faces</u> . | |

次に以上の 8 種の型式について述べる。

- I Dandāka (dandāca) (Fig. 1)

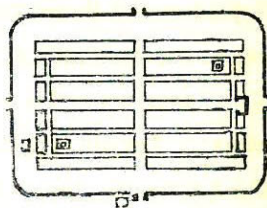
矩形又は四角形で壁で圍繞された型式であり、この型式は Sannyāsins によつて導かれたものであり、特に Harmitage (asrām) の為又は他の宗教的な Community のために plan された。その plan は東西に走る1—5条の平行した Street から構成され、その間の短い Street は夫々中央の Street と2つの点で交叉する。2個の水浴の Tank は Village の北東又は南西の隅に位置し、種々の Shrine は夫々の村人の所属した特別の Sect のために接近して設けられた。主要なものは昇る太陽に面した入口をもつた Raja-patha の西端に面していた。Minor deities は2つの主要な Stseet に面していた大規模な4個の門を有した壁又は塀の内又は外側にあり、北門の壁の外側の近傍には chamnuda の Temple がある。

Varuna 又は Maytra の占めている場所には Vishnu の Temple 及び Adita の占めている場所即ち Village の北、東部には Siva. Temple が設けられた。この Village は特に Brahman の住居が多くその構成は12戸、24戸、50戸、108戸、300戸以上の家屋数によつて区分されていた。ásrama は12戸の家屋で構成された最小の規模であり山又は森の近傍に企劃され、僧侶又は隠者の住所となつていた。yatis 又は Holy medicants or puram は24戸で構成された型式であり、多くは川に接近して設けられた。Mangalam は50戸の家屋で構成されたものの名称であり、神秘的な犠牲を遂行した人々によつて住まはれ、一般に家長が住むとせられた。108戸の家屋で構成された型式を特に Costham と呼ばれていた。

II Nandyāvarta, (Fig. 2)

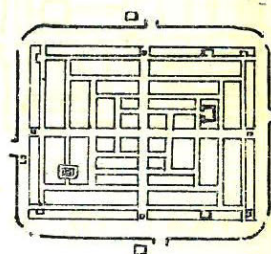
元来 Symbolic figure nandyāvarta (Fig. 8) に基づいた型式である。この plan は oblong 又は Square であり、異つた社会的又は宗教的な Sect の混合した人々に適応せしめたものである。この型式に Chandita, Paramásyica の二種がある。Chandita は64の等積の地区から構成され、それが8つの地区に區別され、最も中央に位した4の等積の地区は Brahmya で Brahma に所属し、全く神聖な目的のための地区である。其の周囲に12の等積地区がある。之を Divya とよび Dévas に属する。次の周囲の地区は20の等積の地区からなり Mánushya とよび主に人間に所属する。更に最も外側部には28の等積地区がある。之を Paysacha と呼ばれ demon に所属していた。次に Paranásyica は81の等積の地区から構成され、9つの地区に区分された。即ち最も中央部の9つの等積の地区は Brahmya に所属し、その周囲の16地区は Divya であり、次の周囲の24区には Manushya と呼ばれ、最も外側に位置した地区32を Payschca と呼ばれたのである。異つた社会的な Garden の配列はその plan に於ての Shading の関係の必要性を示した。Village の中央部では最高階級に属した人々で unshaded の4個の Block で占有されていた。最も外側の隅に

1. Dandaka



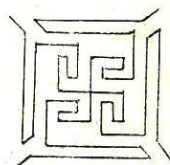
pl. XLIII

2. Nandyāvarta



pl. XLIV

The symbolic figure Nandyāvarta.

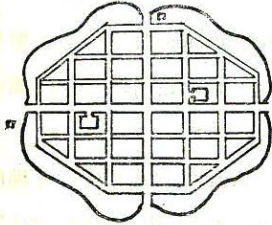


F. 8

は arch 又はそれに類似した装飾を施した Gate があつた。家屋の外側の block は Village の門の近傍におかれた Bazar であり、交通の必要性と Toll の集積する目的のためである。umagga jataka にては北東西南にある 4 つの Bazar について述べている。而してそれは King's city に於て各々の Quarter に役立つていた。cross way の集合した点は Village の中央であり、ここに Brahma の Temple が建立され "祝福の地" とした。又ここには一般人の会合の為の mantapa が建立されていた。尙この型式には種々の神々に奉納された Shrine が多数存在していた。

3. Padmāka

III Padmāka (Fig. 3)



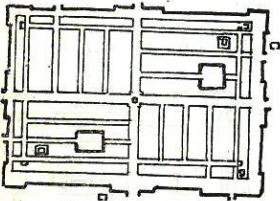
pl. XLIV

この型式は lotus leaf から由来したもので、他の型式とその趣きを異にしている。この型式は勤勉な Town-planner がその objection が単なる感情的に偏することなく、Compass の介在に基づいて方向を対角線的に主要な Street が不吉な感情を回避する為設計された興味ある型式である。恰も車輪の Spoke に等しく、Village の中央部から周囲に向つて放射形を示した plan であり、これ

はその Symbolism のために indian designer が最も希求したものである。然しこの plan に対して次の様な批評が加えられている。(1)外敵の急襲に対しては極めて防禦的に不利である。(2)交通の輻輳に注意を要し Village の中央部では特に家屋又は庭のためには不適當である (3) Street は凡て太陽を受けるのに不適當な方向に通じている。

4. Svastika

III Svastika. (Fig. 4)



pl. XLV

Mistic figure の Svastika に基づいた型式であり、この Svastika の Sign は既に報告した様に世界又は宇宙の 4 個の Quarter を表現している "Magic Square, を意味していた。之は古くから Aryan army の camp に用いられた型式であり、4 個の門を防禦する為形成された。それは又、indo-Aryan の宗教的な Compass でもあり、又 Hindu の宇宙的儀式の一部を形成している運動であり、

蒼空を巡回する太陽の明かな運行を意味している。又それは同形式の Hindu 儀式に於ての Pradakshina 又は Shrine の巡回とも一致し常に右方か左方へ巡回する (右旋) Jaina 哲学では深い意義を与え、常に Evolution の Principle を表現していた。それは Black magic と Volute とを結合しているのである。

この plan に於て著しい特色は各々の Quarter に於ける家屋の Block の方向が右方への旋回運動を指示していることであらう。尙外壁に関して E. B. Havell と Rām Rāz の見解に多少の差異を認めるのである。

V Sarvatobhadra. (Fig. 6)

この plan は殆んど矩形であり、Village の中央部に Brahma, Vishnu, S'iva の中の 1 つの神の Temple を建立せられている。この plan は 4 個宛の Street が直角に交叉し、更に 2 つの Street が cross する。之等の Street の間に 3、4、5 及び更に多数の Street が Village の plan

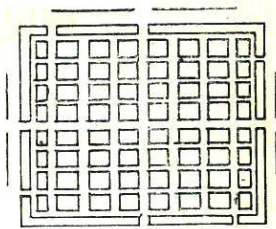
の大きさに感じて平行して設けられていた。Village の corner には Hall 又は College 又は Public Hall が設けられ、南東の方向には、Agi Temple がある。更に旅行者のものとして、Water-Shed も設備され、Village 全体は四角の城壁で圍繞され、4 個の大門と更に 4 個の小門とがある。北門の内側に Mahácáli Temple が設けられ、Chandáless の小屋は Village から 4000 yards 離れた地に建立せられた。水浴用の Tank は Village の南又は北方の地区に設けられていた。

他の Prastara, Carmca, Chatur-mu'cha の 3 型式に関して何等の具体的な記述を示されてはいない。然し恐らく之等の型式も前述した 5 型式と大同小異であるとも考えられる。更に Chatur-muc'ha の型式についてはその図すら示されていない。ただ mānasāra にその名称をのみ記述されているに過ぎない。

要するに Village. Town plan は宗教的な制約の下に規定されているとも考えられる。(本稿は村田博士に並東大近藤氏に御教示を賜はつたことを深謝する)

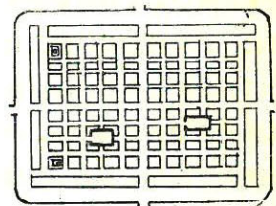
備考 図版の番号 (pl XLIII, XLIV, XLV, XLVI) は Rām Rāz の図版番号である。

6. Sarvatōbhadoā



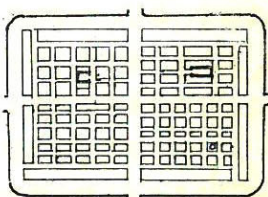
pl. XLIII

5. Prastara



pl. XLV

7. Cārmea



pl. XLVI

註 1 John Marshall : Mohenjo-daro and indian civilization pl. CXIV.

註 2 拙稿 日本建築学会報告 昭和29. 1.

註 3 Abbé. H. Breuili : Le passage de la Figure à lo'rnament p 137.

註 4 chiago にこの講演、World's parliament of Religions. 1893.

註 5 仏像の造形的表現は Gandhara period と考へる。Jos. Burgess : The Buddhist stupas of Amravati and Jaggajapeta. pl. xxxviii. 1887.

註 6 Stupa の欄楯に円形とした浮彫をいう。

註 7 indian Architecture According to mānasāra 'Silpa 'sāstra.

註 8 Essays on Architecture in Hindu.

註 9 Ancieut and Mediuvai architecture in india,

註 10 Gnomon. 指時計 (Sān'ku-s'thāpana-vidhāna) は木で作られ長さ 24a'ngulas で巾はその底部で 6 a'ngulas であり、太陽の影を利用したものである。

註 11 象は南西の monsoon と共に来る雨雲である。vāmana は又 Cosmic crōss の shoot arm である。

註 12 Mangala は又戦の神といった Karttikeya の渾名として第2の意味がある。村又は町が外敵より安全を保障するために一切の関心を放棄する様に Road を設定する。

註 (3) 1 danda は 8 feet とする。1 a'ngula = fingeis breadth

SUMMARY

ON THE CANON IN THE FORMATIVE DESIGN

—The Chinese Canon which Influenced Japan in Olden Times—

Katumi Takada

In the history of Chinese architecture we term the ages of Chou (周), Chin (秦), and Han (漢) the classical age. The Chinese had a norm like the Canon, the artistic law of ancient Greece.

1. In ancient China people worshipped "T'ien-ti" (天帝 God in heaven). This worship led to the idea of the unity of heaven and earth, which implied that both natural and human affairs were ruled by one regulation, the will of god.
2. This idea gave birth to "i" (易), a philosophy based upon divination.
3. Heaven was symbolically represented by a circle, and earth by a regular square, which were drawn with compasses and a ruler. When this norm came to have a (geometrical) relation with mathematics, it was fixed as a canon.
4. Mathematics made its progress in the age of Han.
5. A symbolical formative design was made with this idea of the age as its nucleus, and the canon and mathematics as its instruments. Still now, it is an essential element of the design of an Eastern architect who are engaged in the old style architecture.

ON SWASTIKA PATTERN. (V)

— development of Swastika in India —

Kiyotaro Tsujioi

In India, Swastika was closely connected with religion and used as a Symbol of blessing or benediction in a Special cult. The point of essay is that the development of Swastika pattern had a Sacred meaning as the Town or Village planning.

ON TENDENCY OF DIFFERENTIATION OF DWELLING FORM AMONG THE COMMON PEOPLE AT THE ESTABLISHED PERIOD OF FEUDALISM IN NINKI DISTRICT.

Kosaburo Shiraki.

Taking the opportunity of Taikos readjustment of farming ground, the new class in the agricultural village at the beginning of the modern times. Especially at Kinki arose district, the farmers having no land are apart from farmers who owned the land with the system of producing agricultural products and they could become from owing the land by the way of cultivating agricultural products for the purpose of selling in the market instead of consumption.